

## 本庄のたからもの ～新しい命が生まれ、育つために～

丈野想空・杉原麻央・山田紫音・横山智咲（三田市立立本庄小学校6年）

### はじめに

「ニッポンバラタナゴ」という希少な魚が、校区内のある場所に生息している。数年前から専門家のアドバイスの下、本校の池で保護してきた。しかし、保護止まりで繁殖には至らず、寿命が来れば死に、生息地からまた採取して放流するという繰り返しであった。保護というより、寿命まで生きながらえさせるという状態であった。

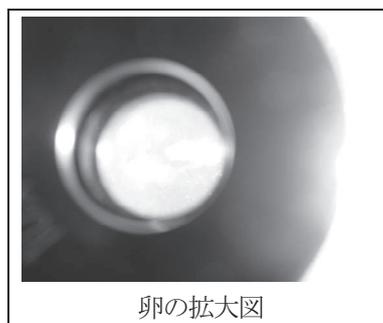
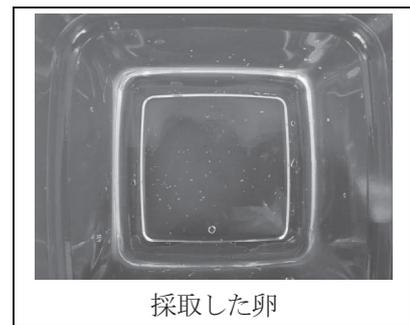
今年度に入り、DNA鑑定の結果、その「ニッポンバラタナゴ」は本庄地区固有種であることが判明した。さらに、生息地の状況が思わしくなく、天候の影響などによって死滅してしまう恐れがあるという状態になっている。本庄地区にしかない他に類を見ない固有種である「ニッポンバラタナゴ」を何とか保護したい。ただ、生きながらえさせるだけでなく、ビオトープを「ニッポンバラタナゴ」が「くらす（生まれ育つ）場所」にしたいという思いのもとに、この取り組みが始まった。

ただ、毎年やっているから同じように「ニッポンバラタナゴ」の保護活動をするというのではない。本庄地区固有種の「ニッポンバラタナゴ」が置かれている状況を5、6年生全員が知り、どうすればいいかをみんなで考えた上での取り組みであった。本庄地区の宝である「ニッポンバラタナゴ」を守ろう。そういう熱い思いのもとに、この取り組みが始まった。

### 具体的な取り組みと結果

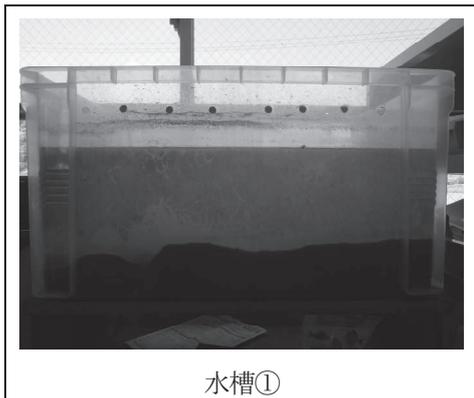
#### ①人工授精

5月8日、人工授精に取り組んだ。みんなで書物やインターネットで調べた手順に沿って、人工授精に挑戦した。メスから卵はいくつか取り出せた。しかし、オスの精子をその卵にかけるのが難しく、うまく受精させられなかったようだ。しばらく、その卵を観察していたが、孵化することはなかった。残念ではあったが、人工授精の方法とその難しさを学ぶことができた。次への課題としてみんなでそれを確認できた。



## ②ドブ貝を用いた産卵

本校のビオトープには、「ニッポンバラタナゴ」の生息地から採取してきたドブ貝が住んでいる。住んでいると言っても、「ニッポンバラタナゴ」とともにとってきた泥の入ったプランターにドブ貝を入れて、それをそのままビオトープにつけて、言わば住まわせているという感じである。ドブ貝をそのままビオトープに放流したこともあるのだが、それではしばらくすると死んでしまっていた。ビオトープの土がドブ貝の生息には適していなかった。そこで、ドブ貝の住んでいた環境をなるべくそのまま再現しようと、ドブ貝の住んでいた泥の中に住まわせたのだが、それが功を奏したようでもう1年以上も生きている。そのドブ貝を使って、人工授精と平行して、水槽ではあるが、自然に近い状態で繁殖させようと試みた。



水槽①



水槽②



水槽②の仔魚

その結果は①の水槽で1匹、②の水槽で2匹が孵化し、水槽を元気に泳ぎ回っていた。みんな大喜びであった。ただ、みんなで成長させようと飼育をしていたのだが、残念ながら成魚になる前に死んでしまった。どこに問題があったのかをみんなで考え、仔魚を育てることの難しさも確認した。

## ③ビオトープでの産卵

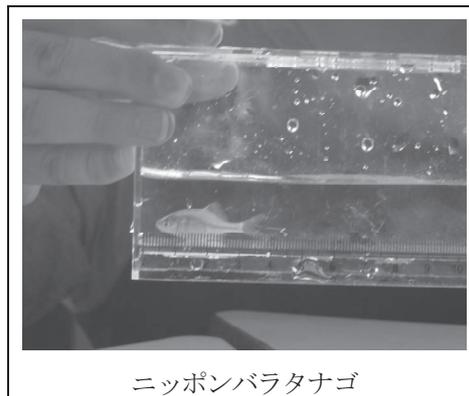
本校のビオトープには「ニッポンバラタナゴ」がいて、ドブ貝もいる。「ニッポンバラタナゴ」が、産卵、繁殖していく条件がそろっているのだが、実際に、産卵、繁殖しているのか、その確認が難しい。そこで、6月9日(金)、5、6年生で仔魚がいるかどうかを確認すべく、あみで仔魚らしきものをすくってみた。だが、残念ながら「ニッポンバラタナゴ」の仔魚を確認することはできなかった。

このことで、ビオトープの中で「ニッポンバラタナゴ」が、自然に産卵、繁殖しているのかを確認することが思いの外難しいことが分かった。「自然に産卵・繁殖しているのかもしれない。」しかし、確かめるすべがない。そんなもどかしさの中、またも次への課題が見つかった。

#### ④現在のビオトープ



ビオトープの生き物採取



ニッポンバラタナゴ

11月1日(木)、ビオトープの生き物採取を行い、現在ビオトープに生きる生物の確認を行った。幸い「ニッポンバラタナゴ」は多数確認できた。またドブ貝も4個体ほどは死んでいたが、20個体以上はまだ生きていた。



生きているドブ貝



死んでいるドブ貝

#### まとめと考察

今回の取り組みで達成したことと胸を張って言えることは少ない。少ない数ではあったが「ニッポンバラタナゴ」の仔魚をみんなで見られたことだろうか。ただ、どうすれば「ニッポンバラタナゴ」を繁殖させることができるか。その重要性や方法はこれまでの取り組みの中でずいぶん理解できたと思う。この試みは、5、6年生での取り組みであったが、来年の「ニッポンバラタナゴ」の繁殖期には、現5年生が6年生として新5年生をリードしながら再度「ニッポンバラタナゴ」の繁殖に取り組んでもらいたいと思っている。

ただ、それまでの間に取り組まなければいけないことはたくさんある。

- ①ドブ貝が生息しやすいビオトープの土壌作りをすること。
- ②ドブ貝が産卵するために必要な魚の確保すること。
- ③人工授精の方法の熟知すること。
- ④自然に産卵、繁殖しているのかを確認する方法を確立すること。

本庄小学校のビオトープ池を「ニッポンバラタナゴ」の第2の生息地とすべくこれからも取り組みを進めていきたいと考えている。